

## アスペクトからみた動詞分類再考 ——「気づかれにくい方言」にふれて——

沖 裕 子

キーワード：動詞分類 進行態 已然態 東西差 アスペクト教授法

### 1. はじめに

アスペクトに関して、現代日本語にはおよそ二つの体系をもつ言語（方言）があることが知られている。ヨル・トルなど二形式で進行態と已然態を語彙的に分別する西日本方言と、テイル一形で進行態も已然態も担う東日本方言である。現代共通語のアスペクト表現は、この東日本方言タイプに属する。

さて、金水（1995）は、進行態についてとりあげ、工藤（1983, 1989）の宇和島方言の記述を参照しながらその東西差を検討し、「シテイルが表す進行態、シトル・シヨルがそれぞれ表す進行態をすべて同じ進行態としてひとくくりにすることはまったく意味がな」と述べた（193頁）。ちなみに、工藤氏の宇和島方言の記述をみると、金水氏が問題にした進行態のみならず、已然態についてもその表す内容はひとくくりにはできないことが分かる。

金水氏においては、動詞にヨル、トル、テイルなどが後接した複合動詞の進行態が問題にされている。本論では、複合動詞形の東西差を進行態、已然態にわたって再検討するとともに、アスペクトからみた動詞分類そのものの東西差についても再考してみたい。

アスペクトの観点からみた動詞分類に関しては、金田一（1947）、奥田（1978）、工藤（1995）などがすでにあり、活発な論議が展開されている。よく知られているように、金田一氏は「継続動詞・瞬間動詞」の別をたて、奥田氏、工藤氏はこれに批判を加えている。奥田氏は「動作・変化」の別をたて、工藤氏はこれを継承しつつ「内的限界動詞・非内的限界動詞」の別をたてている。

本論の結論としては、金田一氏の動詞分類は東日本方言、工藤氏の動詞分類は西日本方言を説明する原理として、それぞれ適切であることを述べるものである。動詞そのもののアスペクト的性格について、「気づかれにくい方言（注1）」差が存在していることを指摘していく。また、大阪方言のテイルは東京方言と同質ではなく、西日本方言型を継承して変化した「気づかれにくい方言」であることも簡単に触れる。

対照方言学的に日本語のアスペクトを説明する目的をもった本研究は、日本語教育で「標準日本語（注2）」のアスペクトを教授する際にどのように説明するか、という課題についても一往の結論を述べることになる。

## 2. 問題のありか

### 2. 1 金水氏が説いたこと—東西方言の進行態をひとくくりにできるか—

金水(1995)は、松下大三郎の説を批判しながら、現代語の進行態と古典語の進行態とは同一に見なせないことを指摘している。古典語との比較という関心から、まず現代共通語と現代宇和島方言のアスペクト体系を対照させ、「進行態」の問題点を浮かび上がらせることを論のひとつの目的としている。宇和島方言の言語資料は、工藤氏の一連の論文を参照したとある。

金水氏は、次のような点を確認、指摘した。長くはなるが現代共通語と宇和島方言との比較について述べられた部分を引用、整理しながらまとめておきたい。

- (1) 奥田(1978)が強調したように、現代共通語のシテイルは主語ないし主体のあり方をさしだす形式であり、シテアルは目的語に着目した形式である。このような体系を統語的アスペクト体系と呼ぶことにする。
- (2) シテイルが意味の上で結果状態と進行的とにまたがりながらも一つの範疇をなしていると言えるのは、これが統語的アスペクト体系を形成しているからである。
- (3) シテイルの持続相としての統一性を見るためには、従来の二分法(結果状態と進行的)よりも、三分法によった方がよい。
- (4) 宇和島方言では、シトルが結果状態を、シヨルが進行的意味を表す。
- (5) シトルはパーフェクト相で、動詞に含意される直接的な結果状態を表す「状態パーフェクト」と、ある運動が完成したあとの形跡を表し、間接的な効力を表す「動作パーフェクト」の両方を含む範疇である。
- (6) シトルで状態パーフェクトを表す場合、他動詞も自動詞も用いることができる。この方言では結果状態の所属先は主語に限定されないで統語的アスペクトではない。これを非統語的アスペクト、または意味的アスペクト体系と呼びたい。
- (7) ある種の動詞ではシトルが進行的意味を表すように見え、シトルとシヨルの意味がほとんど中和していることを工藤(1983)は指摘している。また、シトルとシヨルが同じ状況を指し示し、時間的な意味では対立をなさない動詞の例もある。
- (8) この現象を整理するために、工藤(1983)では動詞の分類を行っている。「運動動詞(A1・A2)・状態性動詞・状態動詞」である。A1の動詞群ではシトルとシヨルが必ずパーフェクト相(完了後の状態)と不完成相(未完了過程・開始直前の過程)とで対立するのに対し、A2ではシトルが完了後の状態ばかりでなく「開始後の状態」をも表し、シヨルと同じ状況を指し示す場合がある。
- (9) この動詞分類は何を指し示しているのだろうか。工藤(1983)では明言されていないが、A1の動詞群は、他のグループと明らかに違う特徴を持っている。それは、動作・運動の完成を意味する状態が、語彙的にあらかじめ決定されているという点である。このような動詞は、最も狭い意味で「限界動詞」とであると言える(コムリー1988参照)。
- (10) それに対し、A2の動詞群は、どのような局面で動作・運動が完成したかという基

準は、語彙的にはあらかじめ決定されていない。つまり語彙的には非限界動詞である。従って非限界動詞は、いったん開始されたら、そのあとはいつでも「した」後なのである。

- (11) 松下(1928)は、全已然(已然態)と半已然(進行態)を区別した。しかし、シヨルの「未完了過程」は進行態なのか、またシトルの「開始後の状態」も進行態に含まれるのであろうか。
- (12) どのように考えるにしても、半已然ないし進行態という概念のままでは、この方言を記述するのに十分役に立たないと思われる。古典語は現代共通語よりもはるかに宇和島方言に近い体系をもっているので、宇和島方言にも古典語にも適用可能なように、松下の概念に修正を加えなければならない。
- (13) そこで、いま仮に「弱進行態」および「強進行態」という操作概念を設定してみる。弱進行態は、非限界動詞について、動作・運動が開始した後、その動作・運動が終了するまでの局面の持続を指し示す。また強進行態は、限界動詞の開始後・完成前の局面を指し示す。
- (14) シトルとシヨルの意味区分は次のようになる。  
 シトル(完成後の状態)……全已然(已然態)  
 シトル(開始後の状態)……弱進行態……シヨル(未完了過程)  
 強進行態……シヨル(未完了過程)
- (15) 「弱進行態」という概念は、「状態」か「過程」かを区別せず、局面の区分のみに着目している。工藤(1983)で強調しているように、シトルとシヨルは同じ局面を表すといっても、シトルは事態を静的・状態的に捉え、シヨルは事態を動的・過程的に捉えるという対立がある。弱進行態という概念を使う限りは、この違いは視界に入っていない。しかし、言語の変化を見たり、いろいろな言語・方言を比較したりする場合は、状態・過程の対立を考えない概念があったほうが便利な場合があると考えるので、敢えてこの区別を無視した。
- (16) これらの概念を用いて次のようなことが言える。宇和島方言の場合、パーフェクト相を受け持つ形態(シトル)は、弱進行態までは表し得るが、これはあくまでパーフェクト相の自然な範囲の内にある、しかし、強進行態に進むことはありえない。なぜなら、強進行態を作る限界動詞は、シトル形をとるとその完成後の状態しか表せないからである。一方、シヨルは弱進行態も強進行態も表せる。これもまた自然な分布である。例えば英語の進行形(BE動詞+現在分詞)もまた弱進行態と強進行態を両方表す(コムリー1988)。
- (17) それに対して、現代共通語では、シテイルは已然態、弱進行態、強進行態のすべてを表し得る。ここでは、弱進行態という領域を介して、已然態と進行態がなめらかにつながっている。つまりシテイルは全体として已然態(パーフェクト相)とも進行態とも言えない範疇をなしているのである。例を挙げる。  
 a 鼠が死んでいる。(已然態)  
 b 鼠が走っている。(弱進行態)  
 c 田中は、今、鼠を水に漬けて殺している。(強進行態)

- (18) aのような已然態を作るのはいわゆる結果動詞で、工藤(1983)の動詞分類で言えば、A1の自動詞とBの「状態動詞」の一部である。bの弱進行態は、おおむねA2の動詞である。cの強進行態はA1の他動詞である。ここで、bはaから見て状態パーフェクトの延長と見ることができる一方で、cから見て進行態の一部と見ることもできる。また状態か過程かということで見れば、aは状态的、cは過程的ということと言えるが、bは状态的とも過程的とも見ることができるのである。つまり、現代共通語は宇和島方言と違って、状態と過程とを形態的に区別するような言語ではない。
- (19) 宇和島方言と異なって、現代共通語においてこのような分布がなぜ可能かと言えば、それは現代共通語が統語的アスペクト体系であるからであろう。
- (20) シテイルは、動詞が担う運動・動作の中から、主語のあり方として最も特徴的・前景的な局面を取り出す。主語の指示対象の変化を表す動詞であれば変化後の状態を、主語の指示対象の運動・動作を表す動詞であればその過程をさし出す。宇和島方言のシトルと現代共通語のシテイルの違いは「殺す」のような限界動詞の他動詞において最も鮮やかに照らし出される。シトルは限界動詞に適用されると、その完成後の結果にしか着目しないのに対し、シテイルは他動詞に適用されると運動・動作の過程を取り出す。なぜならば、他動詞は一般に主語すなわち動作主にとっては(変化ならぬ)動作を表すからである。
- (21) このようにして見ると、シテイルが表す進行態、シトル、シヨルがそれぞれ表す進行態をすべて同じ進行態としてひとくくりにすることはまったく意味がないということが分かる。ある言語(方言・古典語)のアスペクト体系を已然態対進行態という対立で捉えるのではなく、弱進行態を間において、已然態と強進行態がどのように分布するかという観点で捉えることが重要である。また、その言語が意味的アスペクト体系を持つのか、統語的アスペクト体系を持つのかという問題が、それと深くからみあっている。

## 2. 2 アスペクトの東西差はどこに存するか

さて、本論で問題にしたいことは以下の2点である。

- (22) アスペクト体系を考える上で、現代共通語と宇和島方言の差はどこにあるのか。
- (23) 現代共通語と宇和島方言に共通したスケールをたてることは必要なのか。

金水(1995)は、先にまとめた通り進行態を両言語の主な差とみているが、工藤(1995)で発表された記述を読むと、已然態についても大きな差があるとみられる。まずは、両言語の差がどこにあるかを本論の課題とし、その差を記述・説明してみたい。

その上で、現代共通語と宇和島方言両者に共通のスケールを当てることが、共時態の対照言語学として必要なのかどうかについても触れたいと思う。もし、両言語(あるいは三つ以上の言語)の体系の違いをそのままに記述しきることができるならば、おのずから異同は明らかになるものと思うからである。

本論で扱う資料について述べておく。論者はテイル一形の話者であり、現在は言語形成期を過ぎた長野県松本市に再び住むが、18才以降20年間の移動歴があるため本来は方言話者としては適さない。しかし、こうした文法的意味に関しては直感の細かなところまで踏み込む

ため、内省に頼った資料の価値もまた生ずるだろう。そこで、ひとまず沖の内省を中心に、東京方言話者への確認調査を行いつつ、東京方言を母語とする金田一春彦氏の分析資料などを参照し、これを「東日本方言型」「現代共通語」などの名称で呼んで指し示したい。また、宇和島方言については、工藤（1995）による「第5章愛媛県宇和島方言のアスペクト体系」（261～300頁）の記述によりながら考察を進めたい。

なお、本論では、今述べた資料による宇和島方言を西日本の二形アスペクトの代表、先の「東日本方言型」「現代共通語」とみなした資料を東日本の一形アスペクトの代表として叙述していく。しかし、これはあくまでも日本方言のアスペクト分布を説明する基本的な視点を獲得するための第1歩であることをことわりたい。

なお、金水（1995）は、前者を「意味的アスペクト」、後者を「統語的アスペクト」と名づけたが、ここでは前者を、ヨル・トルによる語彙的な意味分担をするアスペクトという点に注目して「語彙的アスペクト」という術語をもって呼びかえたい。

以下、まず、アスペクト形式の分布を概観し、その上で、宇和島方言と現代共通語とがどのように異なるかについて述べていく。

### 3. アスペクト表現の全国分布

アスペクトの全国分布を概観するために、国研（1979）から「花が散っている（進行態）」と「花が散っている（結果態）」の分布図を引用しておく。国研（1999）を参照すべきだが、地点数が多い関係で引用しにくい。そこで、ここでは図1と図2を示しておきたい。

これらによると全国は、大体東西方言型の分布を示していることが分かる。新潟・長野・静岡以東がテイルー形、西日本がヨル・トルなどの二形でアスペクトを担っている。富山・岐阜・愛知などはトルー形である。東日本ではテイルー形の安定した広い分布を示している。京都を中心としたかつての中央語からの伝播によってテイルー形の領域が成立したとは、分布をみる限りは言いにくい。

近畿圏は、テアル系が分布したり、待遇と関ってヨルが用いられる、また京都などではテイルー形型がみられるなど複雑な様相を呈している。大阪では、タールが非情の主語、ヤルが有情の第三人称の主語としか共起しないなど、共通語のアル系とは異なった文法機能を持つことも榎垣編（1962）で指摘されているが、本論の直接の目的ではないのでこれ以上は立ち入らない。

歴史的結果として現在の分布がある。変化の経緯は措いて、共時態としてこれらの言語地図をみると、東日本のテイルー形の方言と西日本のヨル・トル二形でアスペクトを表す方言とがあることが知られる。ヨル・トル二形タイプの言語はかつての中央語であり、テイルー形タイプの言語が現在の中央語（現代共通語）である。両者の性格を、生きている現代語を共時態として観察し、意味的に明らかにしておくことは様々な方面に意義があろう。

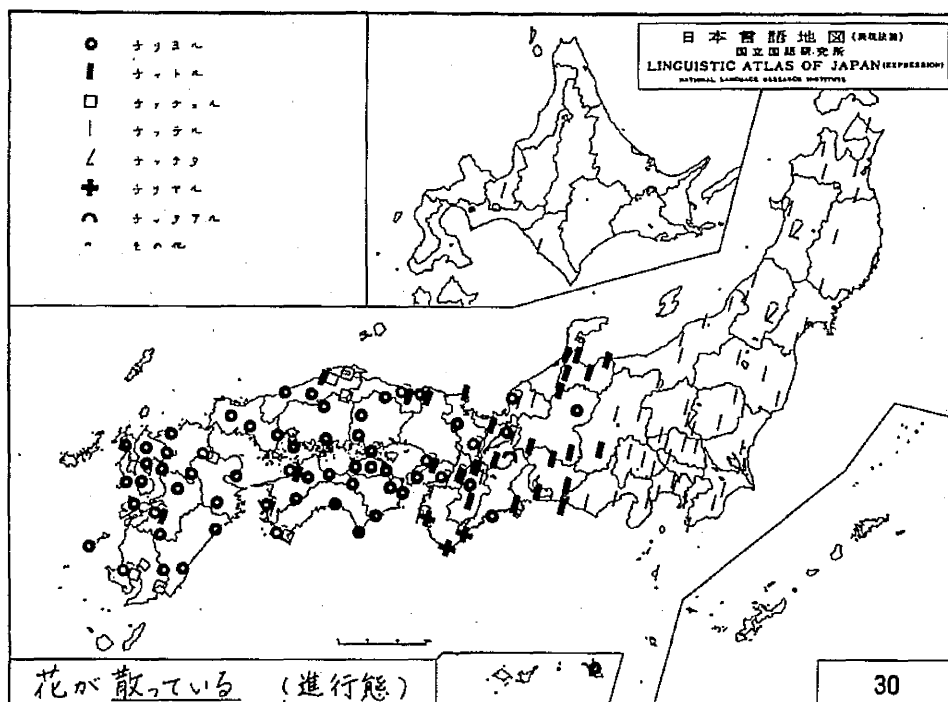


図 1

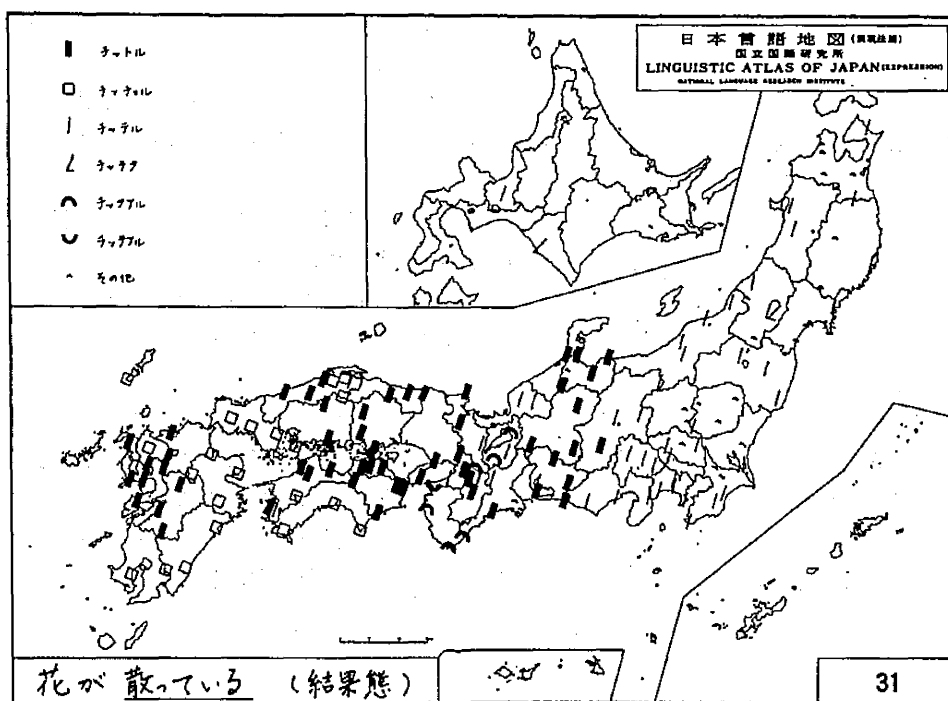


図 2

#### 4. アスペクトからみた宇和島方言と現代共通語

##### 4. 1 動詞のアスペクト的性格と進行態・已然態

宇和島方言と現代共通語とは、進行態のみならず已然態においても異なった様相をみせている。それは、宇和島方言が〈進行〉〈結果〉をそれぞれ表す専用の形式を持った語彙的アスペクトであるのに対して、現代共通語の〈進行〉〈結果〉は一語で担われていることになっている。また、アスペクトからみた動詞自体の性格も異なっているとみられる。

工藤(1995:265)でもすでに「シヨル形式が、標準語のシテイル形式では特別の条件がなければ十分に表現しえない、『来よる、死による、終りよる』のような〈変化過程の進行性〉の意味を表すこと」「シトル形式は、標準語のシテイル形式では、明示的に表現しにくい『猫が障子を破っとる』のような〈客体の結果継続〉や、『歩いとる、たたいとる』のような〈形跡の残存性〉の意味を、特別な条件なしにごく普通に表すこと」と指摘しているが、ここでは意味論的にヨル、トル、テイルを観察し、進行態と結果態が両言語においてどのように違うか再考してみたい。

なお、宇和島方言の例は〔宇〕と表記し、現代共通語の例は〔共〕と表記することがある。

##### 4. 2 進行態の外延は同じか

現代共通語と対照させた時、宇和島方言の重要な特徴だと思われるのは、私見によれば次の二点である。

(24) ヨルが後接することによって、すべての動詞に時間的展開の過程を読み込める。

(25) ヨルは、「限界達成前の段階」と「開始限界達成後から終了限界達成前の過程」の展開とを形態的には区別なく表す。

以下の例をみられたい。

(26) (へびがもがき苦しんでいるのを見ての発話)

昨日、庭でへびが死によった。水かけてやったら元気になった。〔宇〕

(27) 二時頃来たって、試合終わりよるぜ。〔宇〕

(26)については「〈変化の進行性=変化過程の継続性〉を表す。(263頁)」, (27)は「〈変化過程の進行性=限界達成前の段階性〉を表す。(263頁)」と説明されている。

現代共通語では、「死ぬ」「終る」を用いて

(28) へびが死んでいる。〔共〕

(29) 試合が終わっている。〔共〕

とすれば、結果の継続のみを表し、「死ぬ」「終わる」という動詞に変化の過程を読み込むことはできない。

(26)(27)の例と(28)(29)の例を比較すれば、現代共通語では過程を読み込むことができない動詞に、宇和島方言では過程を読み込んでいることが分かる。そして、工藤(1995)を読む限り、次のように存在を表す動詞にも過程が読み込めるのである。(現代共通語では、「\*あっている」「\*おっている」とはいえない。)

(30) この間、山行ったんやが、まだ、わらび、ありよったぜ。〔宇〕

(31) さっきからずっと、部屋におりよる。〔宇〕

つまりは、宇和島方言は「ヨル」という専用の形式を動詞に後接させることにより、すべての動詞に過程を読み込むことができるのだ、と説明できよう。それに対して、現代共通語では、意味的にみて過程を読み込める動詞と読み込めない動詞とがあることになる。

また、(25)については、いかがであろうか。例を引いてみたい。(32)も(33)も「〈過程性＝進行性〉」を表わしているが、(32)は「〈終了限界達成前の段階〉(273頁)」であり、(33)は「〈開始限界達成前の段階〉(274頁)」であると説明されている。

(32) (少し前に上空を見た時のことを思い起こしての発話)

さっき、町の上を、飛行機が飛びよった。〔宇〕

(33) (飛行機が滑走路に向かって移動しているのを見ての発話)

ちょうど飛行機が飛びよったんよ。子供ら熱心に見よった。〔宇〕

(33)の用法は、これまで久野(辰浜)(1977)でも「将然」の用法として説明されており、工藤氏も「開始限界達成前の段階」と説明している。西日本方言に特徴的な用法であり、現代共通語のテイルでは担うことができない事態である。

さて、「飛ぶ」は工藤氏の述べるところの非内的限界動詞である。離陸時点を開始限界と考えれば確かに言語外現実「将然」を指している。しかし宇和島方言では、現実の事態そのものとしては将然であるように我々に見える局面(33)と、実際に動作が始まったあとの局面(32)の両者を、進行を担うヨル形式が表わしている。事態に区別はあり、また、意味的直感でも(32)と(33)の発話の意味の別は区別できるであろう。しかしながら言語形式としてはヨルー形式で両者を指す。つまりは、ヨルはその両者を形態的には区別していないことが知られる。そこでヨル自体の意味としては、〈始まりの局面を広くとらえ・過程を読み込む〉という特徴をたててよいであろう。宇和島方言のヨルの中心的意味としては〈進行〉をたて、その下位分類として〈将然進行〉と〈開始限界後進行〉を位置づけることができる。

宇和島方言では、「シニヨル」「オワリヨル」が言えることは、すでに用例(26)(27)でみた。工藤氏の分類でいえば、内的限界動詞である。これらの動詞にヨルが後接したものが表す過程も、従来の説では「将然」と呼んできた。しかし先に総括したように、宇和島方言ではすべての動詞に過程を読み込める、という事実をふまえれば(26)(27)のようなものも〈進行〉を表しており、過程の展開に入る時点を明確にせず示していると考えてもかまわないだろう。すでに指摘したように、宇和島方言では内的限界動詞も開始限界と終了限界を持つ。そこで「へびが死にヨル」「試合終わりヨル」は〈将然〉とはせず、〈開始・進行〉として定式化できよう。(注3)

シヨルのこのようなあり方は、ヨルの意味を次のように記述することで説明されよう。

(34) 宇和島方言のヨルは、〈前接するすべての動詞に対して〉〈始まりの局面を広く捉え〉〈過程を読み込む〉という特徴をもつ。

なお「状態性動詞のシヨルは〈将然性〉を表すことはない(294頁)」とあるが、あげられている「うつる、くらす、おもう、あきらめる、あつすぎる、作れる」などの「状態性動詞」は、将然という段階が言語外現実としてきわめて認めにくく、まさに状態的であることからくるものであろう。(注4)



次に已然態の差について概観したい。

#### 4. 3 已然態の外延は同じか

現代共通語と対照させた時、宇和島方言の重要な特徴だと思われるのは、私見では次の二点である。

(35) 動詞にトルを後接することによって、〈変化後〉であることを表す。

(36) シトルには、発話時点における変化後の状態の持続は必須ではない。

ここでも工藤(1995)の用例を参照しながら説明を加えていきたい。

(36)について先に述べよう。宇和島方言のシトルは、結果性のほかに〈形跡性〉(注5)を表すことが特筆すべきことである。その際、トルは現在態(現在テンス)で〈形跡性〉を表せる点も注目すべきであろう。〈形跡性〉とは、運動終了後に残された知覚可能な何らかの痕跡から、その運動が(かつて生起し)終了したことを述べる表現で現代共通語のテイルでは担えない事態である。(37)(39)(41)は結果性の例、(38)(40)(42)は形跡性の用例である。〈形跡性〉はすべての動詞についていえるとあるが、非内的限界動詞の〈形跡性〉は、(42)のように〈終了限界達成後の段階〉がそれにあたるとみなされている(273頁)。また、〈形跡性〉は、〈広義結果性〉であるとも説明されている(275頁)。

(37) また、窓を開けとる。はよ、閉めさい。〔宇〕

〈結果継続性〉(窓は開いた状態にある)

(38) また、汚い手で、窓を開けとる。〔宇〕〔内的限界動詞〕

〈形跡性〉(窓は閉まっているが、手の後が残っている)

(39) いま、山に行っとる。もうすぐ帰って来らい。〔宇〕

〈結果継続性〉(山にいる)

(40) また、山に行っとる。洋服を汚のうにして。〔宇〕〔内的限界動詞〕

〈形跡性〉(家に帰っているが、洋服の状態に山に行った形跡がある)

(41) 飛行機は飛んどった。子供らがっかりしとったぜ。〔宇〕

〈開始限界達成後の段階〉(同じ状況で、「飛びよった」と言える)

(42) 町の上を、飛行機が飛んどった。〔宇〕〔非内的限界動詞〕

〈終了限界達成後の段階=形跡性〉(飛行機雲を見た時の発話)

さらに、知覚できる形跡性がもはやなくても、「〈動作のパーフェクト〉として、先行する時点における運動自体に焦点をあてつつ、後の時間段階への何らかの効力を表している(293頁)」用法があるとされる。(44)から(46)であげられている例がそれで、〈効力性〉と説明されている。この場合も「トル」は現在態の例のみがあがっている。

(44) あんた、さっきも、ジュース飲んどるぜ。もうやめさい。おなかこわすけん。〔宇〕

〈効力性〉

(45) あの人、小さい時、アメリカに行っとるんと。〔宇〕〈効力性〉

(46) この間、この川で、一人死んどるんぜ。気いつけさいよ。〔宇〕〈効力性〉

〈効力性〉も、現代共通語のテイル形では表すことができない。現代共通語で「この間、この川で一人死んでるんだ。気をつけな。」とは言える。しかし、(45)(46)の場面では動詞は過去態(過去テンス)になる。「太郎ちゃん、さっきもジュース飲んでたよ。もうやめな。」

「あの人、小さい時、アメリカに行ってたんだって。」など。現代共通語のこの用法はもはや〈効力性〉とは呼べないであろう。

宇和島方言のシトルは、何かよりあとを示している。内的限界動詞なら終了限界よりあと、非内的限界動詞であるなら、開始限界・終了限界よりあとのいずれも表す。ただし、非内的限界動詞の終了限界よりあとの場合は、〈形跡性〉と同じものとして記述されている。非内的限界動詞の場合、開始限界より後である場合は言語外現実の局面としては動きはまだ進行しているので、シヨルとシトルとが同様の局面を表しているように感じ、意味的には中和する。同じ場面をみて、「あ、みんな走りヨル」も「あ、みんな走ットル」も言えるのはその例である。この点を工藤氏が明らかにしたのは重要であった。

また、述べてきたように、シトルは内的限界動詞・非内的限界動詞を問わず、動きや変化がすでに終わっている段階で、痕跡をみながらその動きが行われたことを言い表わすことができた(273, 275頁)。

では、宇和島方言ではなぜ、トルが、現在態で、〈形跡性〉や〈効力性〉を担うことができるのであろうか。また、〈形跡性〉〈効力性〉とは文法的には何なのであろうか。

宇和島方言では、トルを使用することによって事柄だけに言及することができる。つまりトルは、〈事柄が起こった後〉を語彙的に担うことができる形式であると考えればよいであろう。たとえば、「誰かが窓を開ける」「子供が山に行く」というコトが起こった後であることを、トルを後接させることによって表すことができる。そのことが起こったのがいつであるかは、前後の文脈で決定されると考えればよい。非内的限界動詞の場合には、開始限界という時点を超えた段階でも、コトが起こった後とみなされる。

〈コトが起こった後〉で、そのコトが発話時にまだ続いている場合には〈結果性〉の読みが生じ(37)(39)(41)、そのコトの後にすでに別のコトが起こって、そのコトは形跡でのみ知覚できる場合には〈形跡性〉の読みが生じる(38)(40)(42)。コトが起こって、そのコトの形跡も知覚できない場合には、工藤氏が述べる〈効力性〉の読みが生じる(44)(45)(46)。つまりは、トルの中心的意味は、〈コトが起こった後〉を示すと記述すれば足りることになるのである。

このような意味を担うことができるのは、宇和島方言が進行と結果を異なる形式で分担し、使い分けができる語彙的アスペクト体系であることによっている。トルは「〔子供が山に行く〕トル」というコト全体について結果性を述べる構文を構成しているということもいえよう。シトルに関して「結果状態の所属先は主語に限定されない」と金水(1995:177)が述べていることもこれに通ずる。

一方現代共通語のテイルは、「誰かが窓を開ける」「子供が山に行く」というコト自体の結果はとることができない。金水(1995)が明言したように、統語的アスペクト体系である現代共通語は、〔誰かが・開けている〕〔子供が・行っている〕〔飛行機が・飛んでいる〕のように主語の動作の局面を取り出してしまうのである。(注6)

#### 4. 4 大阪方言のテイルについて

現代共通語のテイルについて光を当てる前に、大阪方言のテイルについて触れておきたい。

たとえば、大阪方言では次のような表現が自然である。(この資料は、摂津方言生え抜き25才女性)

- (47) イマ カミ キッテル〈進行〉〔大阪〕〔共〕  
 (48) イマ クチンナカ キッテルカラ オチャ ノンダラ シミル〈結果状態〉〔大阪〕  
 (49) (長い髪の毛を短く切った友人を見て、別の友人に)  
       カミ キッテル カノジョオ ミタ〈結果状態〉〔大阪〕  
 (50) (長い髪を切った友人〇〇を見て)  
       〇〇, カミ キッテル!〈結果状態〉〔大阪〕

(47)は〈進行〉, (48)から(50)は〈結果状態〉であるが、現代共通語では、動詞「切る」に関して〈結果状態〉はきわめて読み込みにくい。(48)のような場面では動詞「切れる」を用い(51), (49)(50)では「切る」の過去態を用いて表現する(52)(53)のが自然である。(注7)

- (51) イマ, クチンナカ キレテルカラ オチャ ノムト シミル〔共〕  
 (52) カミオ キッタ カノジョオ ミタ〔共〕  
 (53) 〇〇, カミ キッタ!〔共〕

また、金水氏は次のように述べている。(再掲)

- (20) シテイルは、動詞が担う運動・動作の中から、主語のあり方として最も特徴的・前景的な局面を取り出す。主語の指示対象の変化を表す動詞であれば変化後の状態を、主語の指示対象の運動・動作を表す動詞であればその過程をさし出す。

「切る」が、「主語の指示対象の変化を表す動詞」か、「主語の指示対象の運動・動作を表す動詞」といえば、大阪方言の「切る」は弱進行態として「(髪の毛の持ち主である)主語の指示対象の変化」も「主語の指示対象の運動・動作」をも表す動詞として機能している。同じ「切る」という動詞がふたつの局面を取り出すことができる大阪方言と、そうではなく前者しか取り出しにくい現代共通語とがあることに注意を促したい。つまりは、「切る」という動詞には両者の読みが可能であるのに、現代共通語では一方に決まるという事実を指摘しておきたいのである。

なお、大阪方言のそれはおそらく二形式で表現される語彙的アスペクトの性格を継承しつつ、それを母体に歴史的に変化した結果生まれた「テイル」であると推定される。現代語の地域差からみれば、現代共通語とは異なる意味の変異であり、「気づかれにくい方言」にあたるのである。

#### 4. 5 現代共通語のテイルについて

現代共通語に話を進めたい。

金水氏は、次のように述べている。(再掲)

- (1) 奥田(1978)が強調したように、現代共通語のシテイルは主語ないし主体のあり方をさしだす形式であり、シテアルは目的語に着目した形式である。このような体系を統語的アスペクト体系と呼ぶことにする。  
 (2) シテイルが意味の上で結果状態と進行的とにまたがりながらも一つの範疇をなしていると言えるのは、これが統語的アスペクト体系を形成しているからである。  
 (20) シテイルは、動詞が担う運動・動作の中から、主語のあり方として最も特徴的・前景的な局面を取り出す。主語の指示対象の変化を表す動詞であれば変化後の状態を、主語の指示対象の運動・動作を表す動詞であればその過程をさし出す。宇和島方言の

シトルと現代共通語のシテイルの違いは「殺す」のような限界動詞の他動詞において最も鮮やかに照らし出される。シトルは限界動詞に適用されると、その完成後の結果にしか着目しないのに対し、シテイルは他動詞に適用されると運動・動作の過程を取り出す。なぜならば、他動詞は一般に主語すなわち動作主にとっては（変化ならぬ）動作を表すからである。

現代共通語が統語的アスペクトであることには異論はない。しかしながら、シテイルのアスペクト的意味のあり方が統語的にすべて決まるかといえ、そのようなことにもならない。「主語—動詞」の指し示す動きを、「運動・動作」として認めるか「変化」として認めるかは、話者の視点で決まる場合があるのである。（注8）こうした事情をよく説明するものとして、金田一（1954：40）を引用する。

(54) 雪が積っている。

の「積る」も元来は継続動詞であって、戸外に降っている雪を眺めながら、  
 どんどん雪が積っている。

という時には、次の節に述べる進行態を表す。「雪が積っている」が既然態を表わすのは、もう雪がやんでしまっている、その時の積雪を見て、「雪が積っている」というような場合である。それは「積る」が瞬間動詞として用いられた例である。

動詞にテイルが後接してできた複合語の意味からこれを分類して進行態と結果態に分け、それぞれの態を作る動詞を「継続動詞」「瞬間動詞」としたのは金田一（1947）であった。金田一氏の継続動詞、瞬間動詞というのは、動詞ごとに固定されたものでなく、複合動詞シテイル全体の意味のあり方によっていわば「逆算」されて記述される概念である。

現代共通語では、「死ぬ・結婚する」のように、どのように表現しようとしてもそこに過程を読みこむことができない僅かの数の動詞が存在する。また、変化後の状態を読み込む言語習慣がない、場面が想定しにくい動詞も「切る・刈る・剃る」などのように多く存在する。しかし、「死ぬ・結婚する」のように、過程の表現が全く無理なごく小数の動詞を除けば、話者がどのような動きとしてそれを表現したいかという視点が、たとえば(54)のように明確に伝われば文法的には許容される。

しかし、同時に次のような事実もまたある。電車のドアがしまりつつあるのを見て、「ドアがしまっております」とアナウンスされる表現、これには違和感がつきまとうのである。（注9）文法レベルでの可否と談話表現の社会的慣習のレベルでの適否には落差が生じる。その間の事情が現代共通語アスペクト表現の適否の判定には反映されるのである。（あるいは他の言語においてもそうかもしれない。）

東日本型アスペクトは、テイル一形であるため進行と結果の表現に形態的な区別はない。しかしながらシテイルという複合動詞がアスペクト的に進行を表わしているか結果状態を表わしているか、あるいは、どのような場面を指してそう表現されているのか、母方言話者には意味的直感のレベルでは区別がある。（注10）

では、「テイル」を意味的にはどう記述すればよいのか。金水氏が述べているように、「現代共通語は宇和島方言と違って、状態と過程とを形態的に区別するような言語ではない。」という指摘は正鵠を得ている。この事実を考慮して、テイルは時間的な〈持続〉を担う、とするのが意味記述としては適当であるかと思う。

しかし先にも述べたように、形態的な区別はないが複合語シテイルはそれを使用した発話の中で〈進行〉か〈結果〉かの意味的な直感の区別はある。進行態・既然態が別語で担われずに広義文脈によって決定される、という点は宇和島方言とは大きく異なるが、そのことから「シテイルは全体として既然態（パーフェクト相）とも進行態とも言えない範疇をなしているのである。（金水1995：182）」という結論は得られないように思う。丁度、宇和島方言では〈進行態〉の下位区分として〈将然進行〉と〈開始限界達成後進行〉という区別をたてたことと同様に、現代共通語では〈持続態〉の下位区分として〈進行持続〉〈結果持続〉が位置づけられると考えている。

#### 4. 6 複合動詞形が担うアスペクトの東西差

以上をまとめると、シヨル・シトルが覆う領域と、シテイルが覆う領域とは、外延自体に差があることをまず認識しなければなるまい。外延は同じだという前提に立って、シヨル・シトルを合わせた意味領域とシテイル全体の意味領域とを対比させて両者を論じるのは、無理がある。両者は本質的に異なった体系であると認識することがまず必要であろう。

### 5. アスペクトからみた動詞分類の東西差

#### 5. 1 アスペクトの観点からみた動詞分類

以上、宇和島方言と現代共通語について複合語シヨル、シトル／シテイルのアスペクトを比較し、意味論的に再考することで両者の違いを整理してきた。

次にアスペクトの観点からみた動詞そのものの分類について、簡単に研究史を織り込みながら、私見を述べてみたい。

#### 5. 2 変化に過程が読み込めるか

現代共通語の分析に関しては、松下氏の進行態・既然態の別に影響を受けている金田一（1947, 1954）がある。状態動詞と第四種の動詞を除いた動作・作用を表す動詞についてみると、氏は、「シテイル」全体でその動作が進行中であることを表すものと、「シテイル」全体が動作・作用が終わってその結果が残存していることを表すものの二種があることを明示的に指摘し、前者を継続動詞、後者を瞬間動詞と呼んだ。

金田一氏は基本的に動詞のスル・シタ形のル、タをテンス形式、テイ(ル)をアスペクト形式と考えている。継続動詞・瞬間動詞とは、あくまでも動作・作用動詞がテイ(ル)形を後接して作る複合語の多義のあり方のみから帰結される動詞の意味分類である点を押さえなければならない。

この金田一氏の動詞分類は奥田氏によって批判され、奥田氏の論は工藤氏に継承されている。奥田氏はスル・シタ、シテイル・シテイタをそれぞれそれ以上分割できない一語と考え、アスペクト体系を成していると考える。つまりは、スル・シタとシテイル・シテイタがそれぞれテンス的に対立し、スル・シテイル及びシタ・シテイタがそれぞれアスペクト的に対立すると想定することになる。その結果、奥田氏の動詞分類では、アスペクト的な対立関係にあるスルとシテイル（あるいはシタとシテイタ）に共通するベースとしての動詞の語彙的意

味を探そうとする。この点で、先の金田一氏とは、形態分析、アスペクト観において、立脚点にそもそも相違がみられるので、金田一氏を批判するには論がかみあっていない。

次に、工藤（1995）によって提出された内的限界動詞、非内的限界動詞の別は、宇和島方言のスルーショルーシトルの対立のあり方から一般化した時に、最も整合性と説得力をもつ動詞分類であるといえよう。宇和島方言では、動詞は次のように分類される（276頁）。

- (55) ①スルーショルーシトルのアスペクト対立がある動詞群
- ②スルーショルーシトルのアスペクト対立が部分的に中和する動詞群
- ③ショルとシトルのアスペクト対立が中和する動詞群
- ④アスペクト的対立がなくなる動詞群

①は、シトルの意味とショルの意味が結果と進行で対立する。また、②はシトルがショルと同様の局面を表わす。こうしたショルとシトル（とスル）の意味的対立の様相から、①に属する「あける、あずける、かぶる、あく」などの動詞群は「内的限界動詞」、②に属する「うごかす、たべる、あそぶ、とぶ」などの動詞群は「非内的限界動詞」、③に属する「ある、おる、ありふれどる、こみいっとる」などの動詞群は「状態動詞」と分類、命名されている。

金田一氏の「シテイル」の分析に従うと、動詞は継続動詞と瞬間動詞とに二分される。前者は、〈時間的な長さをもつ〉動詞、後者は〈瞬間的作用〉を表す動詞である。〈瞬間的作用〉を「変化」とすると、「変化」は一瞬にして終るとみなされるわけである。現代共通語においては、この分析は、テイルー形でアスペクトを担う東日本方言話者の意味的直感にもよく合致している。つまりは現代共通語においては、「変化の過程」というものが矛盾概念である動詞のグループ、すなわち瞬間動詞が存在することを認めないわけにはいかない。

ところで、金水（1995）によれば、限界動詞とは

(56) 動作・運動の完成を意味する状態が、語彙的にあらかじめ決定されている動詞であり、非限界動詞とは

- (57) どのような局面で動作・運動が完成したかという基準は、語彙的にはあらかじめ決定されていない。「歩く」を例に取れば、一步步いても、3キロ歩いても「歩いた」ことになるのであって、「歩く」という動詞自体にはどの時点で完成と見なすかという情報は含まれていない。

と説明される。両者は、「一時間～」のように時間量を表す副詞成分で修飾できるかどうかというテストでも確かめられるとされる。（以上179～180頁）

- (58) ×一時間殺した。〔限界動詞〕
- 一時間歩いた。〔非限界動詞〕

動作・運動の完成を意味する状態が工藤氏が述べる〈内的限界〉であるとするれば、「殺す・開ける・帰る」などは内的限界をもつ動詞であることには疑いがない。内的限界点を〈一瞬の変化〉（すなわち瞬間）で捉えるのが金田一氏が分析対象とした言語（現代共通語）の性質である。

しかしながら、ここで、時間量を「一時間」ではなく「一時間かかって」などとするといかがでだろうか。限界動詞をも修飾することができるようになるだろう。

- (59) ○一時間かかって殺した／瓶のふたを開けた／帰った

工藤氏の分析に従うと、先に4. 2で整理したように、宇和島方言の「ヨル」は、前接する動詞に変化の過程が読み込める。「へビが死にヨル」「試合、終わりヨル」などがその例であった。変化に過程が読み込めるというのはどういうことか。「死ぬ」「終る」が一瞬の変化とみなされるのではなくして、展開する時間の長さをもちうる変化とみなされていることである。先の現代共通語と対比すると、内的限界を目指しながらかつ変化過程を動詞に読み込めるのが、工藤氏が分析対象とした言語（宇和島方言）であると考えられる。

「瞬間動詞・継続動詞」をテイル形以外のアスペクト形式をもつ言語（方言）にあてはめても説明しえない部分が出てくるし、「内的限界動詞・非内的限界動詞」をヨル・トル形以外のアスペクト形式をもつ言語（方言）にあてはめても説明しえない部分が出てくるといえる。

### 5. 3 東西共通の動詞分類をたてられるか

工藤氏は、(60)のように述べ、現代共通語の動詞の分類を(61)のように行っている。

(60) 金田一1950は、〈継続動詞〉か〈瞬間動詞〉かという時間の長さによる意味特徴で、動詞を2分類した。これに対して、奥田1977は、〈主体の動作〉か〈主体の変化〉かという意味特徴によって、動詞を分類した。奥田論文に述べられているように、継続か瞬間かによる分類は、広く普及しているにも関わらず、無理があると思われる。

(工藤1995: 71)

- (61) (A・1) 主体動作・客体変化動詞      ——— 内的限界動詞  
 (A・2) 主体変化動詞                      ——— 非内的限界動詞 (73頁)  
 (A・3) 主体動作動詞                      ——— 非内的限界動詞 (73頁)

\* (A・1) はすべて他動詞、(A・2) は基本的に自動詞 (72頁)

(61)の分類では、(A・1) (A・3) は、主体の動作を表わす。現代共通語は基本的に統語的アスペクトなので、これらの動詞はシテイルで〈進行〉を担う。(A・2)の主体変化動詞は、主語の指示対象の変化を表しているの、シテイルで変化後の状態〈結果継続〉を担う。現代共通語を記述する上では、シテイルの用法差をみていく点で、むしろ/(A・1・A・3)対(A・2)/という対立が認められることが分かる。奥田氏が初めにたてた「主体動作」対「主体変化」の対立の図式に戻るのである。

ここで金田一(1954: 40)が指摘した事実(64)に戻りたい。場面が読み込めれば、主体動作動詞でも〈結果継続〉は可能であるし、主体変化動詞でも〈進行〉の解釈は可能であった。一般的規則を把握する傾向としては認められるが、〈動作〉か〈変化〉かという特徴は現代共通語のアスペクトからみた動詞分類において絶対的なものではないことが知られる。むしろ、東日本方言型のテイル一形アスペクトのあり方からすれば、動詞に過程が読みこめる、過程が読みこめないという別が重要であると考えられる。したがって複合語の意味のあり方から「逆算」して見出す、時間的な長さの観点からの分類である「継続動詞・瞬間動詞」の別は、東日本方言のテイル一形および現代共通語を説明するのに適当な記述であると結論づけたい。

一方、先にも述べてきたように、宇和島方言では進行をヨル、結果をトルが語彙的に分担することで、すべての動詞にはひとしなみに過程が読み込まれるシステムになっていた。そうした中で、シヨルとシトルが意味的に対立しているのが「内的限界動詞」であり、シヨル

とシトルが意味的に中和するのが「非内的限界動詞」である。「内的限界動詞・非内的限界動詞」は、言語外現実を指す語彙的（指示的）意味に説明を求めることもできようが、シヨル、シトルの対立のあり方を説明する概念として重要である。「内的限界動詞・非内的限界動詞」の別は、宇和島方言の記述にとってきわめて有効なのである。

## 6. おわりに

以上、アスペクトに関して現代共通語と宇和島方言との差異を、まずシヨル・シトル、シテイルという複合動詞を観察することによって押さえ、その上で、動詞自体のアスペクト的性格が両言語でどのように異なっているかを考察した。

宇和島方言は語彙的アスペクトであり、現代共通語は統語的アスペクトであることがすでに指摘されている。そうしたシステムの差に伴って、宇和島方言のヨル・トルが覆う意味領域と、現代共通語のテイルが覆う意味領域とは外延自体が異なっていること、また、両言語でアスペクト的観点からみた動詞のあり方も異なっていることをここでは指摘した。

大きな差は、宇和島方言がすべての動詞に過程を読み込めるのに対して、現代共通語では過程を読み込む動詞と過程を読み込まない動詞の別があることである。

宇和島方言ではアスペクトの意味をヨル・トルという別語で担うことから、構文的にはコト全体をとりあげてそれぞれ〈進行〉〈結果状態〉の意味を表すことができる。コト全体をトルがとりあげることににより、〈結果状態〉ばかりではなく〈形跡性〉〈効力性〉を表せる仕組みが生まれている。つまりは、トルの持つ意味は、前接する動詞が命題文として担うコト、その〈コトが起こったあと〉と記述できる。また、ヨルは、〈将然〉と〈開始限界達成後〉を形態的には区別なく表わすことができる。そこでヨルの意味は、〈前接するすべての動詞に対して・始まりの局面を広く捉え・過程を読み込む〉と記述できる。

現代共通語のテイルは、統語的に主語の指す動きの局面と対応してはいるものの、それが動作であるか変化であるかについては決まらない場合がある。そこで、過程を読み込めないごく一部の動詞を除いて、文法的には話者の視点によって動詞に過程を読み込む場合と過程を読み込まない場合とを選択することができる。それに応じてシテイル全体が〈進行〉か〈結果状態〉かの生成・解釈が決まる。（ただし一般的な表現・解釈である言語習慣が成立しているものもあるので、文法的には言えるが表現の適否としてはおかしいという判定が生ずる場合もある。）複合動詞自体の形は一つであって、形態的には区別されない。そこで、テイルの意味としては〈持続〉を記述する。〈進行持続〉か〈結果状態持続〉かはシテイル全体で決まる。「継続動詞」「瞬間動詞」の別は、複合動詞シテイル全体の意味の解釈から引き出される性格のものである。シテイルが〈進行持続〉の解釈であれば前項動詞は過程を読み込んで成立しており、シテイルが〈結果状態持続〉の解釈であれば前項動詞は過程を読み込んでいない、とみなした結果がそれぞれ継続動詞、瞬間動詞である。なお、大阪方言のテイルは現代共通語と形態は同じであるが意味・用法は異なる。西日本方言の語彙的アスペクト体系を継承して変化した「気づかれにくい方言」であることを指摘した。

以上のような差異が宇和島方言と現代共通語にはある。動詞自体は共通する語形も多いが、アスペクトを担う体系が異なっているために、アスペクト的観点からみた動詞の性格分類に



はひとつの尺度を当てはめることができない。「気づかれにくい地域差」「気づかれにくい方言」をここにも指摘することができる。

金田一氏の述べる「継続動詞・瞬間動詞」の別は、東日本方言型一形で担う現代共通語のアスペクトを記述するのに有効であり、工藤氏の述べる「内的限界動詞・非内的限界動詞」の別は、西日本方言型二形で担う宇和島方言のアスペクトを記述するのに有効な動詞分類であることを述べた。

このような現代語の変種の観察記述を通して現代共通語の性格を明らかにすることにより、日本語教育で「標準日本語」のアスペクトを教授する際の説の妥当性についても一往の結論を述べたことになる。

なお、山口幸洋氏は、「方言文法とくにテンス・アスペクトに関わる言語調査のあり方について」と題した論の中で、次のように述べている。(山口1994:110)

(62) 「区別のあるものにとっては区別がないことが理解できず、区別のないものにとっては区別があることが理解できない」は、文法カテゴリーに関わる一つの原則のように思われる

東日本の「ッけ」などを例に引きながら、テンス・アスペクトに関しては質問調査法では実態が得にくいこと、調査者が(62)をふまえなければ見落とす(あるいは見過ぎる)実態があることに警鐘を鳴らしている。形態の手掛かりがあるとはいうものの、意味の変異に関わる研究の難しさがここにある。フィールドワークと内省資料、あるいは山口氏が有効利用を唱える談話資料など、限られた方法を生かしながらどのように実態に迫ったらよいのかを含め、近畿圏に分布する一形アスペクトの意味記述は更に後日を期したい。また本論で扱った東西差の考察結果をふまえ、京阪方言における「気づかれにくい方言」である「～かける・～ておく」の意味・用法の拡大が説明できると考えるが、これについてはいずれ稿を改めて論じたい。

資料を提供していただいた話者の方々に、御礼を申し上げます。

小論の一部は9月18日に行われたナシ方言研究会で発表した。席上、貴重な御助言をいただいたことを記して感謝いたします。

## 【注】

(注1) 「気づかれにくい方言」とは、共通語と形式が同じかもしくは似ていて、意味・用法が重なりながらずれており、その地域では全国共通語と意識されている俚言もしくは部分体系などを指す。沖(1991, 1996)参照。

(注2) 現代共通語とはほぼ重なる概念とみてよいであろう。

(注3) 未調査のため不明だが、「開ける」などの内的限界動詞では、今缶切りをとりあげた瞬間(将然・開始限界達成前)を「開けヨル」といい、缶切りで切り進めているところ(事態としては開始限界達成後、終了限界達成前)を「開けヨル」ということも可能ではないかと想像される。「死ぬ、終る」についてはいかがだろうか。

(注4) 状態性動詞に分類されているものの中でも「光る、怒る」などは、「(稲光が) あ、光りヨル」「先生、怒りヨル」などが言えるか言えないか。確認調査が必要かもしれない。

(注5) 〈形跡性〉は工藤氏の術語。

- (注6) ただし5. 2で述べるようにそれだけでは現代共通語の記述には不十分である。
- (注7) 「〇〇(ワ) カミ キッテタヨ」と、過去の事態として述べる時は、〈結果状態〉をテイル形で使用することができる。
- (注8) このことを受信者の側からみれば、副詞や指し示される場面とのつながり等をもて解釈を決定するということになる。
- (注9) 三井はるみ氏談。(1961年小金井市生まれ。18才より移動歴あり。) なお論者も同様の内省。
- (注10) 意味とは母語話者の直感の中に存在しているものである。意味的直感がある、ということと、それを明示的に説明できる、ということは別問題であることは述べるまでもないであろう。

### 【参考文献】

- 樺垣 実 (1962) 『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 沖 裕子 (1991) 「気づかれにくい方言——アスペクト形式「しかける」の意味とその東西差」『日本方言研究会第53回研究発表会発表原稿集』
- 沖 裕子 (1996) 「アスペクト形式「しかける・しておく」の意味の東西差——気づかれにくい方言について——」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点 上巻』明治書院
- 沖 裕子 (1999) 「チャレンジコーナー」『月刊言語』第28巻第1号 大修館書店
- 奥田靖雄(布村政雄) (1977) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」『国語国文』8 宮城教育大学
- 奥田靖雄(布村政雄) (1978) 「アスペクトの研究をめぐって(上・下)」『教育国語』53・54 麦書房
- 金水 敏 (1995) 「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古希記念国語学論集』汲古書院
- 金田一春彦 (1947) 「国語動詞の一分類」金田一編(一九七六)所収
- 金田一春彦 (1954) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」金田一編(1976)所収
- 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』麦書房
- 工藤真由美 (1983) 「宇和島方言のアスペクト」『国文学 解釈と鑑賞』第48巻第6号
- 工藤真由美 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学3』むぎ書房
- 工藤真由美 (1995) 「アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——」ひつじ書房
- 久野(辰浜) マリ子 (1977) 「相生方言のアスペクト——「居る」・「て居る」について——」『都大論究』第14号
- 国立国語研究所 (1979) 『表現法の全国的調査研究——準備調査の結果による分布の概観——』
- 国立国語研究所 (1999) 『方言文法全国地図』第4巻
- 方言研究ゼミナール (1994) 『方言資料叢刊第4巻 方言アスペクトの研究』
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』中文館
- 山口幸洋 (1994) 「方言文法とくにテンス・アスペクトに関わる言語調査のあり方について」方言研究ゼミナール(1994)所収